

資本主義と医療サービス～マルクスの所説に基づいて～

有史以前から人類は病魔との闘いを強いられてきた。その中で医療行為は社会の存続のため欠かせないものとして存在してきたと考えられる。社会生活が全面的に商品取引を通して営まれる資本主義商品経済においてはこのような医療行為も商品取引の対象となる。資本主義商品経済の下では医療行為が医療サービスというサービス商品となり売買されるのである。これが、資本主義における医療サービスの取り扱いの理論的前提といてよい。医療行為がサービス商品として取り込まれることを労働力の商品化を前提にしつつどのように把握していくべきか。マルクスの所説に基づきながら資本主義と医療サービスの関係を解明することが本報告の課題である。

そのため、本報告では以下のような手順で検討していく。

第一に、（資本主義それ自体が労災職業病に代表される疾病構造を生み出しているのが）医療サービスが対象とする疾病の資本主義的な意味づけである。結論を先取りするならば、資本主義が労働力の商品化をその規定的要素としている以上、疾病イコール正常に労働しえない状態という把握が相応しいと思われる。その意味で、医療サービスとは、「疾病や苦痛を取り除く」という使用価値を通して労働力という商品を修繕し、労働力の維持・再生に寄与するサービス商品ととらえることができよう。

第二に、医療サービスの価値論的性格についてである。医療サービスは、何かを付け加えるというのではなくマイナスをできるだけ解消するという性質を有している。医療サービスは、その点で育成費として労働力商品の価値を形成しうる教育サービスなどとは異なる性質を有するといえる。マルクスは、「どんな事情のもとでも、医師のサービスは生産の空費に属する。これは労働能力の修繕費に計上されうるものである。」（『剰余価値学説史』）と指摘する。医療サービスは、可能ならば回避することが望ましい空費ではあるが、資本主義的生産様式の継続のために欠くことのできない労働力を保全するため総資本にとって必須であり必要とされるサービス商品でもある。

第三に、では、この修繕費としての医療サービスを資本はどのように処理・負担しようとするのか。いわゆる社会政策論争での論点がここに再現する。すなわち、個別資本の合理性と総資本の合理性の相反である。さらに、医療サービスの売買への国家の介入を想定するならば医療保険制度をめぐる「総資本家すなわち資本家階級と、総労働者すなわち労働者階級とのあいだの一闘争」（K.I.S.249）として考察する必要がある。

第四に、利潤獲得の手段としての医療サービスについてである。資本は、利潤追求を目的としてあらゆる生産部門に浸透してゆくが、医療サービスもその例外ではない。医療が、資本投下の場となり、商品化された医療サービスが利潤獲得の手段となり価値・剰余価値を形成するものとなる。この観点からも資本主義商品経済の下での医療サービスを検討してい

く。たとえ医療保険制度の下で医療サービスが公定価格で売買されるとしても資本はその制度に適応して利潤を獲得している。資本が取り扱うことによって医療サービスはどのような特性を帯びるのかを検討する。

以上の四点を中心に、資本主義における医療サービスを原理的にどう把握すべきかを報告する。